

眠たい者は眠れ

九月三〇日、採用予定者の教育も終わり、それとともに医大も卒業した私達は、暫く休暇を貰えることになった。私の区隊からは二名軍医候補生になれなかった。一名は身体が弱く、一名は成績が悪かったためであつた。誰かが「まだ、軍医予備員があるからあきらめるな」と言つて慰めた。他の区隊から何名不合格者が出たか知らないが、ある区隊の者（仮に姓をWとして置こう）は、私達の心情をそのまま訴えたために、不合格にされてしまった。

彼、Wは軍医学校長閣下との会食の時「区隊長殿方は私達を教育される時、そんなことをしたら、お前達は将校にしないと何時も言われますが、軍医学校長閣下は私達を将校にされる積もりで教育されているのでございますか、将校にされない積もりで教育されておられるのでございませうか」と私達が知りたくてたまらない本当のことを尋ねたばかりに、不合格者にされてしまったそうだ。軍隊はいろいろなことをするなあとは私はWにいたく同情した。

区隊の者は、皆一応自宅に帰れるので、おお喜びであつた。七日間の休暇中の毎日の献立表を考えていた者が多かつた。朝、味噌汁、昼、ぜんざい、夜、寿司など色々家の人に作つて貰

う予定にしていた。私は両親がいないので、長崎の下宿に帰るしかない。両親のある者がうらやましかった。

休暇後、私達は十月十日に群馬県高崎市の十五連隊補充隊に入隊した。全員、講堂のようなところで起居したが、七日間くらい内務班で生活したことがある。

私は日本で一番強い兵隊は九州の兵隊と思っていたので、十五連隊が一番強いという話には身びいきもいい加減にしろと言いたくなつたが、よく聞いてみると嘘でもないようである。日露戦争の旅順の攻撃の時、抜群の手柄を立て、高崎山という地名が残っているくらい強いのだそう。十五連隊でも早稲田や相模原と同じように腹が空いた。

炊事に食缶を返しに行った時、「貴様達、襟章ばかりキラキラさせやがって、食缶の洗い方は、初年兵にも劣るやないか」と炊事の上等兵に言われた。私は別に喧嘩をする気もないので、黙っていたが、気の荒い福岡出身のD候補生にそれを言つたから大変なことになった。Dは「貴様、上等兵のくせに何をいうか。軍曹の襟章は伊達に付けているのではない。おそれおおくも天皇陛下から賜つたものだぞ。それを食缶の洗い方くらいで文句を言うとは何事だ。上官侮辱だぞ」と怒鳴つた。上等兵は震え上がった。兵隊同士の喧嘩なら内々で済むが、私達のような下士官待遇の者に罵声を浴びせたら完全に上官侮辱罪となる。本人は元より主計少尉までが誤

りにやって来た。私達はDの勇氣ある行為に感心したが、翌日の朝飯で復讐された。どんな風にして作ったのか知らないが、ドベドベとしたお粥でもないご飯で、例えば炊き上がった飯に痰壺の中身をおつけたような感じの物であった。味噌汁は味も無く、こんな嫌がらせが、あと一カ月も在隊中続くのかと思うと、私はうんざりしたが、その朝だけで終わってホッとした。十五連隊のことを聞くと何時もあの嫌な朝飯を私は思い出す。

私達の演習は、よく二〇〇メートルくらい離れた競馬場で行われた。連隊からはずっと駆け足であるから、皆息が切れた。うまい具合に途中に鉄道の踏み切りがあった。高崎は上越線、信越線の列車が走っており、それに貨物列車の入れ替えがあるので、たいがい踏切りは遮断機が降りており、私達はそこで止まって一息つくことが出来た。汽車様々である。

競馬場では、上等兵の助手が長い棒の先に飛行機のチャチな模型をつけて五〇メートルくらい先から「飛行機、飛行機」と言つて私達の方に走ってくる。私達はそれに向けて小銃を発射するのである。また、荷車の梶棒を持つて、荷車を尻の方から私達の方にガラガラと押して来て、それが戦車の代わりであった。馬鹿にするのもほどほどにしろといったくらいであった。子供の戦争ごっこもいいところである。本気で戦争する積もりかと聞きたいくらいの演習であった。

二十四キロメートルくらいの行軍に出掛けたことがあった。私の前で食事をしているR候補生は朝、昼の食事を演習のため一緒に貰っていたが、「やめられないなあ」と言いながら、全部食べてしまった。演習の途中で民家から買う積もりであろうが、いい度胸である。

十五キロメートルくらい歩いた時、私の横にいたB候補生がパタツと倒れた。続いて二、三人が次々倒れた。驚いた区隊長は、指揮者のH少尉に私達の区隊が保育隊であることを告げた。保育隊であることを隠して訓練を受けようと、私達と区隊長は話合っていたのであるが、この後に及んではそうも言っておれず、告白するつもりになったのである。途中の民家に落伍者を預け、私達は最終目的地の賈前神社に参拝した。

私とR候補生は区期した同期生を連れて帰るようにH少尉に言われ、私達の乗車駅の時間を教えられ、列車で帰る皆と別れて、落伍者を預かっている民家の方へ歩いて行った。とちゅうでR候補生は何か食べ物がありそうな店があると、「ちょっと、寄ってくるから」と言って、出かけて行った。その間、私は銃をキチンと肩に担いで道に立っていた。何も食べ物にはありつかなかった。

落伍した友達元気になっていたので、連れだって指定された列車に乗った。列車は満員で皆離れ離れになって各車両にいた。私は一番前の列車の運転士の後ろにいた。「兵隊さん、兵隊さん」私の右後ろの方で声がする。見ると、一人の老婆が風呂敷を少し開いて、折り詰めの握

り飯を私に一個とれと言っているのであった。回りに兵隊は私以外にはいないので、私に言っていることは確かだと思った。私は腹も減っていなかったし、また、握り飯を貰ったくらいで肝っ玉の小さい私達の区隊長からとやかく言われるのも嫌であつたので、「有難うございませう、が、よろしゅうございます」と言つて受け取らなかつた。本当に老婆の心づくしには感激した。あの頃の地方には、まだ、こういう美風が残っていたのか、と今でもその時の光景を思い出すことがある。

外出が許されて、高崎の街に出たが、行くところがない。飲食店に一軒よつて連隊に帰つてきた。兵隊が外出から戻つてきた。一等兵であつたが、外套を脱いで、帯剣を外すと、軍服の上着の裏側から、手品師みたいに色々な食べ物を取り出したのには驚いた。兵隊と食べ物とは切つても切れない関係がある。ある区隊長が話していたが、某連隊では連隊の周囲の鉄条網の下から、食べ物が差し入れられていたそうだ。その区隊長の言葉を借りると「食わさんとする親の心と、食わんとする子の心が一体となつて」鉄条網の下へ親が食べ物を長い紐を付けた風呂敷に包み、鉄条網の下から紐を連隊内に投げこみ、子はその紐を引っ張り、食べ物を手に入れた事件があつたと言う。

私達のハイラルの部隊の見習士官も兵隊の時、家族の者が持つてきたポタ餅の食べ場所が無くて、厠の大便所に座り込んで食べたと言つていた。

さき頃、私が読んだ、横田正平著の「玉碎しなかった兵士の手記」（草思社刊）も大部分が食べ物の話で、如何に兵隊が食べ物の取得に苦しんだかが、こと細かに書いてある。

私達は、この連隊で初めて組戦闘の訓練を受けた。何のことはない。分隊戦闘が出来ないので三、四人が一組となり壕を掘り、その中で戦えということであつた。

営庭で夜、斥候の行動をどういう風に行うかという映画を見せられたが、敵に出会ったら、隠れるとか、下がるとか、という方法ばかりで、私の横にいた同僚が「何だ、敵に会ったら逃げろということじゃないか」と言つた。最後まで私は見なければいけないと思つて見ていたが、映画が終わつたら同僚は誰もおらず、どうなっているんだらうと、頭を傾げながら宿舎に帰つたら、皆私より早く宿舎に帰っており、私が一番最後で、自分の馬鹿さ加減につくづく愛想が尽きた。皆私より機を見るのに敏なものには感心した。

第一匍匐ほふくから第四匍匐まで、助教の軍曹から習つたが、第一匍匐の姿勢、格好を見た同僚は、「盗人の格好だなあ」と呟つぶやいたが、全くそれ以外に形容出来ない歩きかたであつた。

兵隊と一緒に生活をした時は、私は第一中隊の内務班に起居した。ある朝、舎前で一中隊の

全員が兵舎の方を向いて休めの姿勢で待機していたことがあった。連隊の営門から八〇メートルくらい東方にある通用門から連隊付きの老中佐が馬に乗せられて（乗ってではなくて、馬上でゆらゆら揺れていたから矢張り乗せられていたと言った方が適切だと私は思う）入ってきた。老中佐に対して私達は背中を向けている。中隊長は老中佐に気が付いて、部隊の敬礼をしようとした。老中佐は片手を挙げて上下に軽くゆっくり振り、敬礼は「よいよい」というような仕草をした。この時早くというか、この時遅くというか、中隊長は「氣を付け、回れー右」と号令を掛け、おお急ぎで中隊の右端に走って行き、抜刀し「かしらー右」と大声で言って、捧げ刀した。老中佐は馬の上でゆらゆらと敬礼して私達の前を右から左へと通りすぎて行つた。あんな差し迫つた状況で、あれだけの見事な指揮と敬礼の号令が掛けられるとはと、私は心から感服した。その後、色々な上官に対する敬礼を見たが、あれほど鮮やかな動作はついぞ見なかった。私は歌舞伎のどんな演技より、あの敬礼の仕方が勝っていると信じている。

第三匍匐を連隊の東南にある演習場で五〇メートルくらいさせられたが、物凄くきつかった。連隊の裏の河原では、重機関銃に縄をつけて兵隊が四人くらいで匍匐しながらずるずると引つ張る訓練をしていたのを見たが、大変だろうなあと同情した。

先日、私は毎日新聞を読んでいた。「若い日の私」と言う記事、加藤寛氏（経済学者）が十五

連隊での訓練した兵隊の日常の様子を記されている。

「真夜中、疲れに疲れ、ただひたすら眠りこけているというのに、何と無情！ しじまをつき破る空襲警報のサイレン。いっせいに毛布をけつて飛び起きる。そんな時、いつも一本の赤い線が壁に沿って上へ上へと伸びていく。初めのうち、私にはそれが何であるか分からなかった。何しろ、まっ黒な中での懐中電灯のわずかな明かりにみえるだけだから、見当がつかないのも当然だろう。

実は、これは南京虫の行列だったのである。眠っている私たちに、昼間、天井にかくれていた南京虫が、ゾロゾロ降りてきて、腕や足をびったり締めているひもの間に食い込み血をすすめるのだが、これが突如の変化にあわてて天井に戻っていく。この南京虫の大脱走が一直線になり、赤い線になってみえるのである。

私が入隊した高崎連隊は乃木將軍が連隊長をしていたという歴戦のほまれ高かったから、建物も古かったし、シラミ、南京虫の巢といわれた。戦争末期昭和二十年に、二等兵（最下級の兵隊）として入隊した私にとって、この連隊での生活は、苦しみと憎しみの連続であった。古兵と呼ばれる上官たちの新兵に対する苛斂誅求は、陰湿で言語に絶した。天皇陛下の名のもとに、その暴力をほしのままにふるった。新兵の中には、半狂乱や自己喪失に陥った者、自らの腕を断ち切って除隊を願った者など、尋常の生活とは思えなかった。

こんな経験は、私たちの世代なら多かれ少なかれ味わっていることではあるが、こんな異常なことをしなければ、戦争で敵を殺せないぞというのが、この異常さを肯定させる論理でさえある。

こんな生活の中で、私の心の中には、目的のためには手段を選ばないということへの憎しみが育っていった。そして、いつも死に直面しなければならぬという諦観ていかんが培われたのではないだろうか。そこで戦争から解放された時、私には負けたということよりも、束縛から解放された自由の空気を吸い込むことに大きな喜びが感じられた。束縛された中でのどんな豪華な食事よりも、自由の中での粗末な食事の方がはるかに勝っている。

だから私たちの世代には、モノへの執着が薄い。一度捨てた命だから、あとは余生だと思っている。敗戦になって軍隊という巨大な組織が崩壊した時、上官たちは、争って軍の食糧や砂糖、そして資材をわが家へと運び込んだ。自由を最大のたまものと思った私には、軍の物資をもつて帰る気など全くなかった。

物資を勝手に持ち去る上官たちのあさましい姿を、ぼんやり見ている私を、不憫ふびんに思ったのか、一人の上官がこれをもつていけと私にくれたものがあつた。せつかくだからともち帰つたが、何とそれは、警報の時鳴らす手まわしのサイレンであつた。

平和の時代に、そんなもの、何の役にも立たないし、コメに代えることもできない無用の長

物である。しかしそれは、わが青春の総決算を示すサイレンである。わが心の中に甘えとおごりが生じた時、心の中にサイレンが鳴り響く。そして南京虫に襲われたあの兵舎の一隅が浮かんてくる。

そんな戦時のさ中、学徒出陣でほとんど学生のいなくなったある日、車中で熱心に本を読みふけている先輩とめぐりあった。もうすぐ戦地へ行く身のはずなのに、といぶかる私に、彼は言った。『戦争で先に散った仲間、天国で自分の読んだ本のことを話してあげるのだ』と。その人の名は知らない。しかし、それが私の行く道を決めた。

私の余生は、この若き日の記憶に支えられている。

同代著「若い日の私」昭和六十三年七月二十九日

私達は十一月十三日頃、東京の早稲田の校舎に帰った。班長は第一中隊の軍曹や曹長が来た。私達が間もなく見習士官になったので、彼らより階級が上になった。彼らは私達の食事係のよいうな役目と不寝番の仕事をしていた。見習士官になる時は、運動場に全員が集まって神林医務局長から陸軍衛生曹長の階級に進め、見習士官を命ずるといような言葉があったような気がする。講義は軍医学校でそれぞれ専門の教官から教えられた。

ある日、朝四時頃起こされて、皇居の参拝に行き、その後、平常通りの授業が行われたことがあった。午前中の授業は何か受けられたが、午後は、軍医学校の大講堂で病理学の講義がスライドを使って行われたので、皆居眠りした。部屋は暗い、講義は余り面白くない、眠らない方が不思議である。私も知らぬ間に寝ていた。病理の教官の「寝ている者は起きろ、そして起立しろ」という大声で目を覚ました。私も眠っていたので起立した。四分の三くらいが起立した。教官は「軍人というのは、起きろと言われたら起きているんだ。寝ろと言われたら寝るんだ。戦えと言われたら戦うんだ。死ねと言われたら、死ぬんだ」と言っただけを吐いた。まことにものともな話で、反論する余地はない。なるほど、そういう考え方もあるのかと私はひどく胸を打たれた。

戦術を教えてくれたM大佐とは違うが、どちらにも理屈がある。私は今後どう生きようとも、理屈がチャンとついた、自分で納得出来る生き方をして行こうと決心した。教官は「眠たい者はいるか、いたら手を挙げろ」と言った。私はそんな者はいないだろうと信じていたら、一人手を挙げた。教官は「よろしい、お前は俺の講義中寝ていてよろしい」と言っただけを続けて行った。手を挙げた眠たいと言った見習士官は、どうどうと机の上に覆いかぶさるようにして寝ていた。彼が羨ましいと思った。しかし、それとはまた別の意味で教官も偉いと感じた。見習士官の時に私が受けた強烈な思い出の一つである。